

---

# 狼男

マル丸円

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狼男

### 【Nコード】

N6285D

### 【作者名】

マル丸円

### 【あらすじ】

道端で野垂れ死にそうになっていた狼男とのお話とんでもないサプライズがあったりなかったり。

## 狼男

「んでさ、やつぱ俺は生肉しか食べないイメージついちゃってるのかな？そりゃあね、俺だつて狼男さ、狼さ。でもね、俺焼いた肉のほうが好きなんだよ？特にネギタン？こんがり焼いてレモン付けて食べるの大好きなんだよね、それでね・・・」一人暮らしをする大学生である僕は、現在自宅のこたつで、人語をしゃべる巨大狼の愚痴なんかを聞いている。

なぜこんなわけのわからん狼男の愚痴なんかを聞いているのかといえば、さつき台風の雨がそのまま雪になったような吹雪の中、寒くて道端に倒れていた狼男さんの尻尾を踏みつけて、黄泉の世界から連れ戻してしまったんだ。それで「一晩泊めさせなければ、ハラワタ××して　　したのち　　して燃えないゴミの日に袋に詰めて出してやる」と脅されたからである。

んで、殺されるのは嫌なので、家に連れて来て風呂に入れてあげてご飯を御馳走し、こたつで酒を酌み交わすと、これがなかなか面白いやつで、なんか意気投合してこうして雑談中である。

「ネギタンいいねえ〜でも僕はハラミかな、ちょっと生の部分残してやるとこれがうまいんだよ！」

「ハラミもいいなあ、じゃあ今度一緒に焼き肉にでもいくか」

「ナイスアイディアじゃん、じゃあどこいく？やつぱ肉巻？」肉巻ってのは俺の行きつけの焼き肉ができる定食屋だ。安いしうまいし、

店長には味があるし、看板娘の涼ちゃんかわいいしとんでも一級品のすごい店だ。大学の友人や、家族にそこから知り合った酔っ払いのオヤジともいったことがある。

「えっ？・・肉巻はちよつとなあ〜・・」さっきまでほろ酔い気分  
で、いい顔してたのに急に眼が泳ぎ始めた。

「んっ？なんだ、涼ちゃんに告って振られたんかよ？」あの子に振られて店に行きづらくなるなんてよくあることだ。涼ちゃんは誰にもなびかないから人気なのだ。まあかくいく僕は、いつも見守るだけでデートの一つも誘えた試しもない。

「ははは・・まあそんなとこだ。・・それより、駅の近くに新しい店が出来たらしいからそっちなんかどうだ？まあ行くからには人間の姿だから、今みたいなやり取りはできんかもしれないが」ああ忘れてたそうだ今日は満月だったな。雪雲に隠れて見れなかったが、うちの月の満ち欠けが記されたカレンダーを横目でチラッと見ると、確かに今日は満月。それでこいつは、狼男ってわけか。たぶん戻ったらごっつい男なんだろうなあ。

「お前の人間の姿ってどんな感じだ？声やらしゃべり方で男なのはわかるが、お前と話していると初対面という感じが全くしないからな。もしかして俺の友人のひとりか？」

「ああそんなとこだ、おまえカンがいいな探偵にでもなれるんじゃないのか？」

「マジかよ誰?!」「いわねえよ、どうせ明日になったらわかるんだ、それまでおとなしくしてな」「ああ〜？そりゃねえぞお前、今夜死んだらどうすんだよ？」

まあそんなこんなで、酒も会話も進み、気づいたら寝ちまっていて、ふと尿意に目が覚めると、午前2時45分。眠い目で、トイレに行き。ぼーっとしながらコタツに入りなおし、また寝てしまった。

「んああ・・・」ゆっくりと目が覚めると、目の前に狼男の代わりに人間がいた。でもそいつは、小柄な体型でサラツサラの黒髪をして、胸のあたりに山が二つあった。まあようは“女の子”だった。それでなぜか僕はその女の子を腕の中に抱いている。

「・・・はあ？」眠気なんかぶっ飛んだよ。だってその女の子、肉ぎの看板娘の涼ちゃんだったんだもん！！

僕の腕の中で眠っている涼ちゃんの睨がゆっくり開き、半分開いたところで、顔を上にあげ、僕と目が合った。

しばらく沈黙が続く。僕と涼ちゃんは、目を合わせたまま固まっている。

「おっ、おはようございま・・・す・・・う」急にうつむく涼ちゃんの耳は真っ赤になっている。僕の顔も今真っ赤だろうなあ。

「おはよ・・・えつと狼男・・・さん？」とりあえず聞いてみた。間違いないのだが・・・。

「あっはい・・・でも狼女でした・・・アハハ」まったくその通りだ。

「とりあえず・・・朝ごはんにしようか」

その後僕達は、こたつを出て、僕が用意した朝食を食べ、とりあえ

ずもう一度こたつに入って、状況を整理した。狼女こと涼ちゃんの家系は、代々狼化できる能力があるらしく、いつもは、コントロールして、狼にならないようにできるが、昨日は調子に乗って、友人とバカ飲みして騒いで、コントロールが緩くなってしまう、満月だったことも手伝って狼化してしまったそうだ。ちなみに狼化すると言葉使いが乱暴になり、声も男のように低くなるそうな・・・。それでたまたま通りかかった僕を脅して、家に入りまあ楽しく雑談し酒を飲んでいたと・・・まあなんともおもしろい喜劇だ。

「えつと、じゃあ送ってくよ、親父さん心配してるだろうし」ちなみに親父さんとは肉壱の店長のことだ。

「やつ、やめたほうがいいですよ、お父さん私が男の人に朝送ってきてもらった上に、狼化のことバレたって知ったら、ぜったいあなたのこと噛み殺しちゃいます。私そんなの嫌です！」俺のこと守ってくれるのか涼ちゃん、ほんとかわいいなあ。

「かみ殺されるのは、いやだな・・・」

「そつそれじゃあ、私は帰りますね！」涼ちゃんはずばっと立ち上がり、ダツシユで玄関まで行った。

「あのお！」姿は見えないが、玄関のところにいるのだろう。

「んっ？なに？」

「今度のデート、楽しみにしてますねっ！！」あつ・・・昨日の約束・駅前焼き肉屋一緒に行くって約束したな。

「よっしゃー！じゃあ俺の奢りな！！」ハハツ・・・恥ずかしくてこた

つから出たくないよ。

「はっ・・・はいつ!!!!」

狼女も悪くないな、でも親父さんにかみ殺されるのはカンベンだ。

さてと、風呂入ってひげそったら肉壱に朝飯食いに行くかぁ。

(後書き)

おもしろかったですでしょうか？

感想・改善点など待っております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6285d/>

---

狼男

2010年10月12日08時12分発行